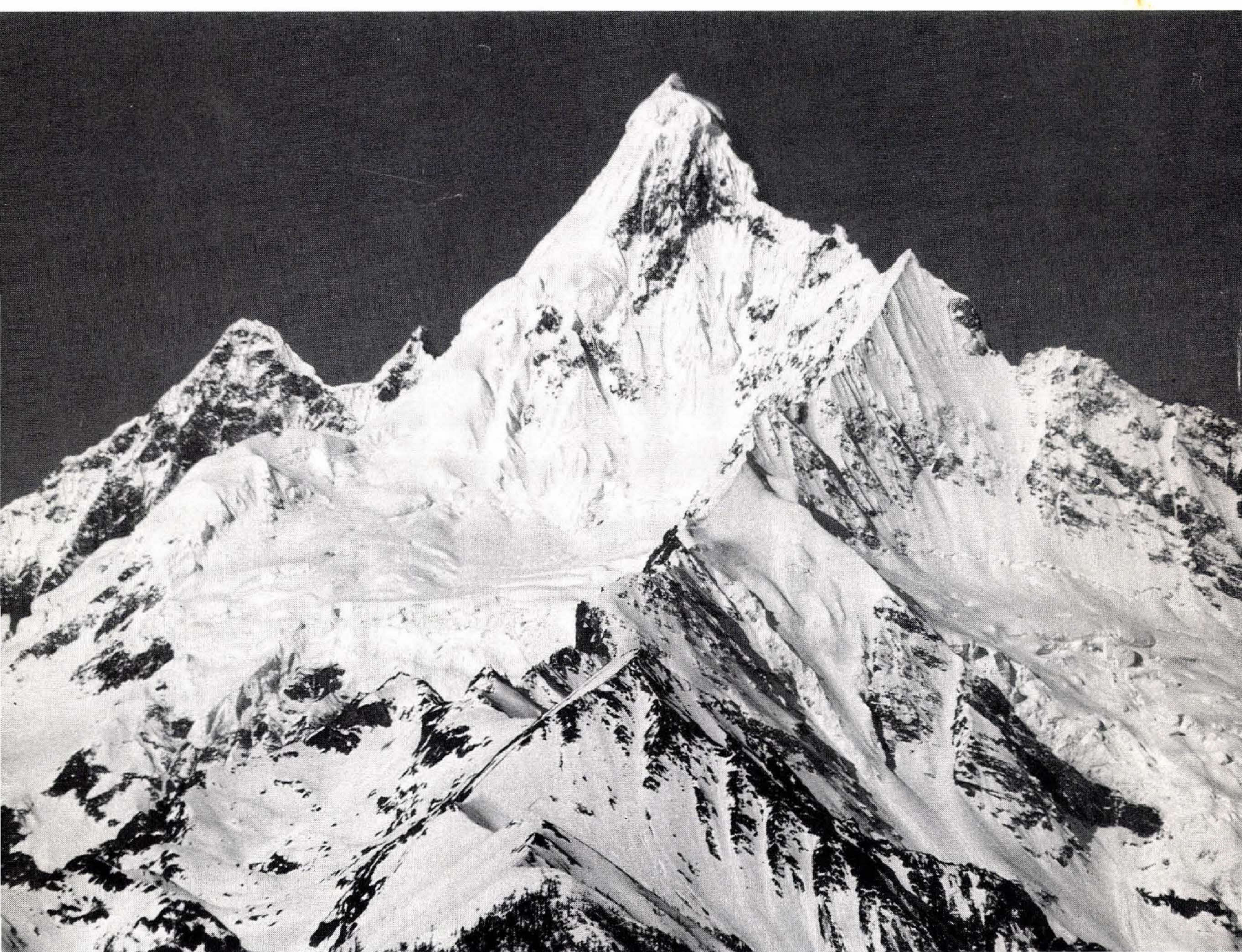


針葉樹会報

1993. 8. 第79号





針葉樹会報 第79号

目 次

三たび中国・雲南省へ.....中村 保 1 -梅里雪山から東チベットをうかがう-	1
ホワイト・セールへの旅.....引地 真 9	9
「アフリカ行-ラクダ達との四日間-」斉藤 誠 12	12
「岩手山」歩き河野 正 18	18
会務報告..... 20	20
編集後記.....22	22

梅里雪山山群「面茨娑峯」6,006m
(メンジボ)

三たび中国・雲南省へ

一梅里雪山から東チベットをうかがうー

中村 保

「少数民族の習慣にしたがって自宅で夕食を差し上げたい。」運転手の李さんから徳欽(阿敦子)に着いた日に招待された。李さんは少数民族ではなく漢族だが徳欽生まれでチベット人が八割を占めるこの最奥の邑で育った人で、漢族とは異なる習慣を身につけているのが嬉しい。漢族の無関心さに比べて常に感じるのだが、外来者に対する少数民族の人達のホスピタリティーは心暖まる出会いをもたらしてくれる。



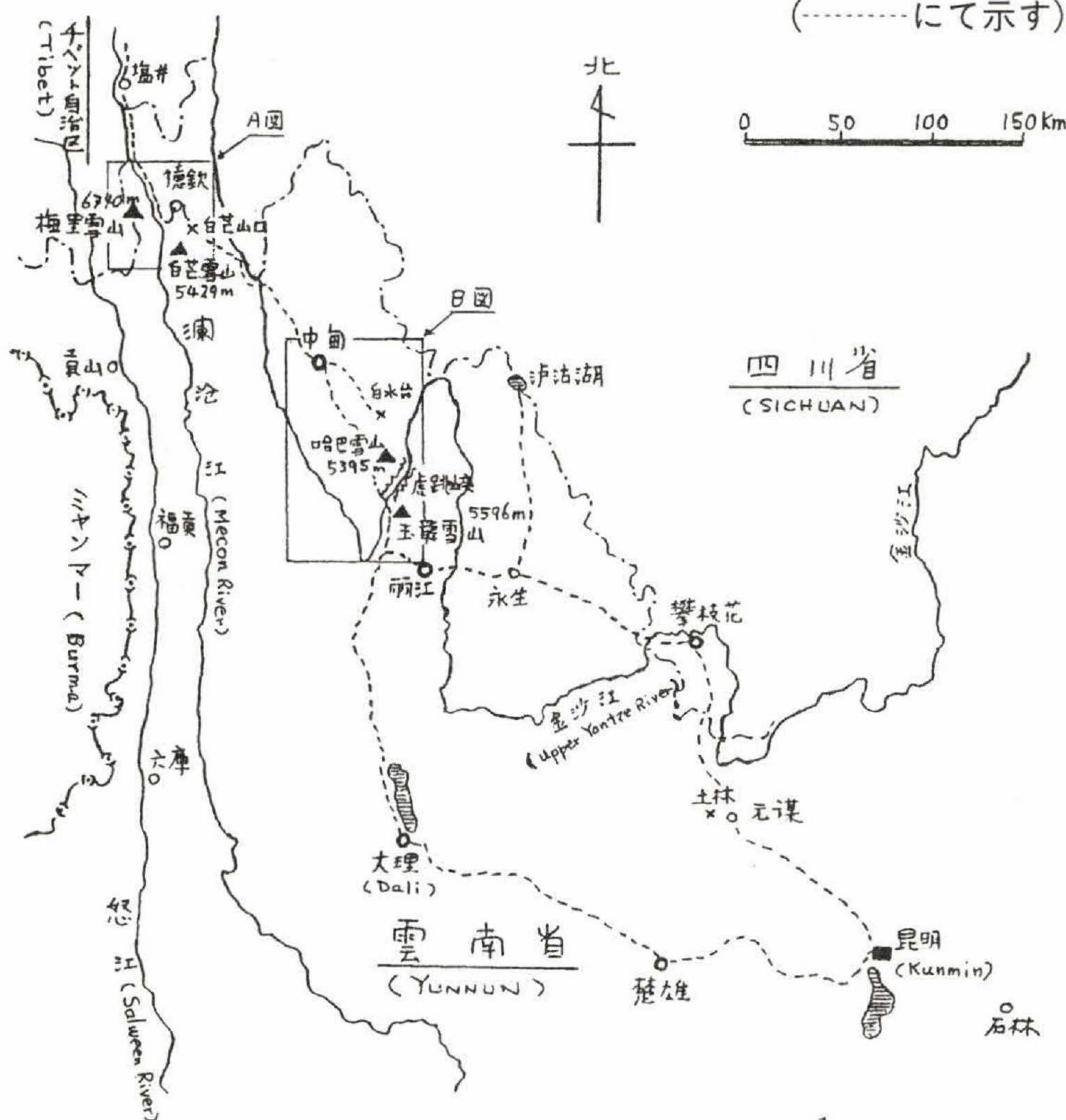
梅里雪山山群主峰
「カワ格博峰」6,740m
(カワクボ)

四川と雲南にのめり込んで三年になるが、今回は仕上げと東チベットへの可能性を探る目的で迪慶藏族自治州の中甸付近の山と徳欽県の白芒山から梅里雪山山群(カカルポ)と瀾滄江(メコン河)上流の峡谷をチベット側まで辿る計画をたてた。帰路には母系家族と通い婚の風習を今に残す雲南・四川の省境にまたがる泸沽湖のほとりに住む摩梭人(モーソー人、納西族の支派)を訪れることも予定に加えた。幸い天候の不定なこの地方にしてはまれにみる好天に恵まれ、真に充実した成果をあげること

四川と雲南にのめり込んで三年になるが、今回は仕上げと東チベットへの可能性を探る目的で迪慶藏族自治州の中甸付近の山と徳欽県の白芒山から梅里雪山山群(カカルポ)と瀾滄江(メコン河)上流の峡谷をチベット側まで辿る計画をたてた。帰路には母系家族と通い婚の風習を今に残す雲南・四川の省境にまたがる泸沽湖のほとりに住む摩梭人(モーソー人、納西族の支派)を訪れることも予定に加えた。幸い天候の不定なこの地方にしてはまれにみる好天に恵まれ、真に充実した成果をあげること

1993・4～5月 雲南省 旅行ルート

(-----にて示す)



ができた。省都の昆明市を発って戻るまで一日間、三菱パジェロを駆って二八〇〇km、きついドライブの苦しさも楽しい思い出となった。行程およびルート、山群の概略図はスケッチで示す通り。

玉龍雪山西面



玉龍雪山西面の大岩壁

一昨年春の怒江（サルウィン河）のときは打って変って天気はよい。丽江近くまではすてなじみの路。虎跳峽の手前で金江を渡って中甸への登りにかかる。雲南・チベット公路（滇蔵公路）の幹線道路なので中甸までは舗装されており快適なドライブを楽しむ。金沙江沿いに仰ぎ見る玉龍雪山の西面は圧倒的に迫る大岩壁である。哈巴雪山と玉龍雪山の間を巨大な斧で断ち切ったようにできたゴルジュ、虎跳峽に三〇〇〇mの高差でなぎ落ちる岩稜と側壁の荒々しき、スケールに言葉を呑む。クライマーの訪れる日は来るだろうか、かつて岩になじんだ者

にとって中国に居ることを一瞬忘れさせる迫力のある景観である。公路は金沙江の支流を遡か登って中甸高原へと続く。

五〇才のフリーター

中甸は迪慶藏族自治州の州都だが、周囲の四二〇〇―四五〇〇m級のアルペンの山と、なだらかな高原、針葉樹の原生林、ラマ教の大僧院の美観には似つかわしくない、街自体は埃っぽい風情のないところである。宿泊した州の招待所で外人グループと会う。オーストリア、スエーデン、アメリカとそれぞれ一人旅の連中が一室に泊っている。概して欧米人はガイドもつけず、許可もとらずに金をかけないで可成り無鉄砲な貧乏旅行を平気でしている。中国当局も碧眼の輩には多少大目に見ている感じがする。それにひきかえこちらはジープ台をハイヤーしてガイド付の大名旅行、ガイドは欧米人は金にならないとこぼしている。中甸で出合ったうちの一人のアメリカ人は五〇才のフリーを自認、二週間かけて山間を歩いて納西族の写真を撮りつつ中甸に辿りついたと。このご仁、ミネソタ州の人でエンジニアの学位をもっており、働いて金をためては一年ぐらい放浪に出る暮らしをしている。すでにサハラ縦断、パタゴニヤ、アマゾ

ン、シルクロード、世界の秘境を殆んど歩いてる。自由なアメリカ社会だからできることで、日本の終身顧庸の会社主義の社会ではできないだろうと、オールド・フリーターは風のごとく去って行った。

再び金沙江へ下る

朝靄にかすむ中甸高原は夢幻的な静謐につまれてる。納嶺海をめぐる無名の雪峯に陽がさし、にわかには水墨画の風景から色彩豊かな油絵の世界に変わる中を三七〇〇mの峠を越えて、原生林と岩峯の谷間をぬって公路は一気に崖の縁をジグザグに下り、金沙江に降り立つ。対岸には白芒雪山が立ちはだかる。路はいったん四川省に出て、再び雲南側に入りしばし段丘沿いに進み、また金沙江を渡って奔子欄（二〇五〇m）に着く。このあたりはグレートヒマラヤが東の端が大きく南に屈曲する横断山脈の核心部で、サルウィン、メコン、金沙江（揚子江上流）の三大河が最も接近して南下しているところ。互に峡谷を隔てる背稜は二〇〇〇―三〇〇〇mの高差で迫っており、その険阻な自然が住みつく人々の従来を困難し、多くの少数民族が棲み分けている原因になっていると言う説を実感する。



中甸のラマ僧院



白芒雪山 支峯 5,000m



徳欽の街

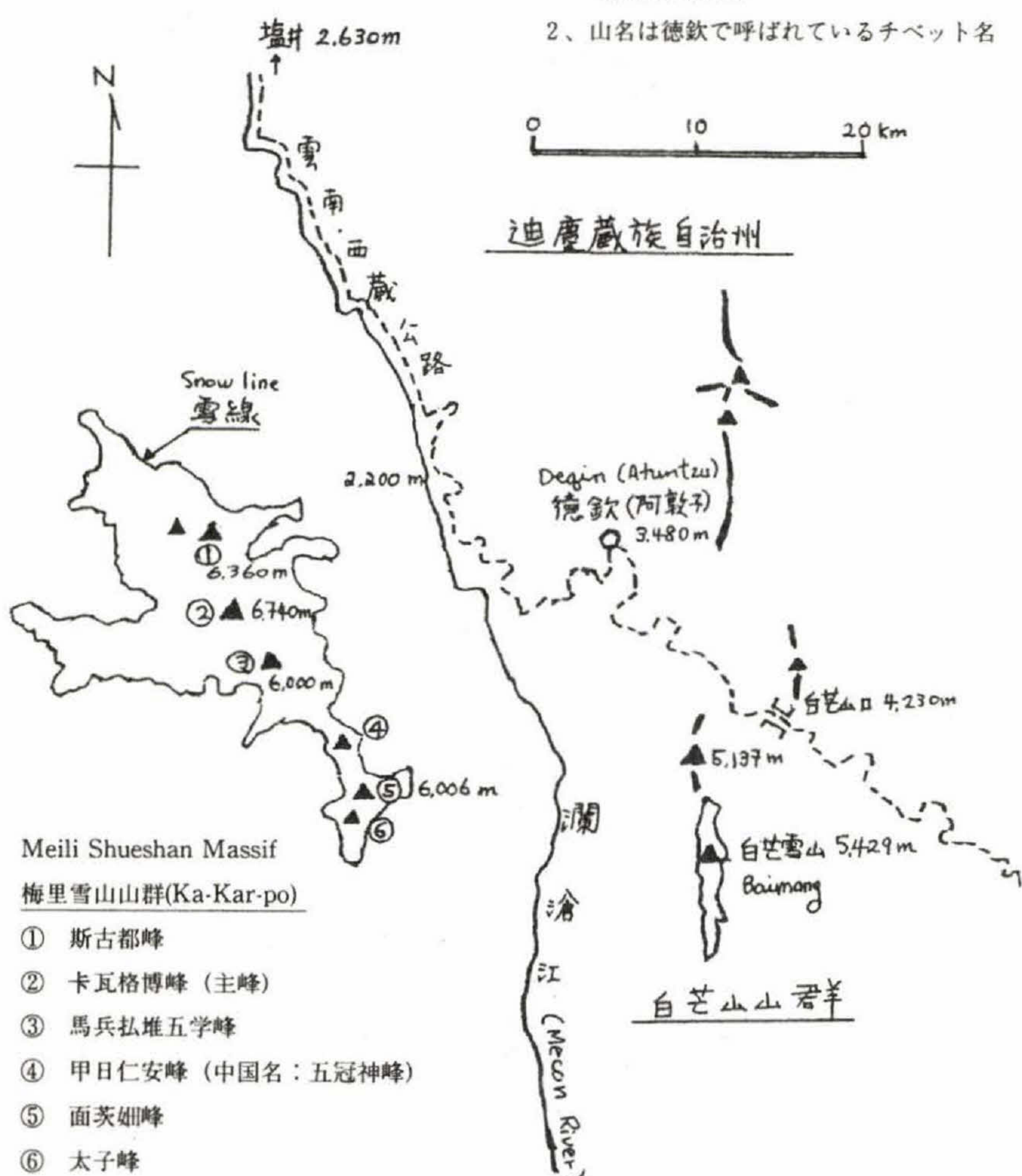
金沙江を渡って路は白芒雪山（ペイマン・シユエシヤン）山群の峠（四二三〇m）に向かつて支谷を登る。途中こじんまりしたラマ僧院を通り残雪の中を開けた台地状のコルにでると、正面に白芒雪山の全容が姿を現わす。立派な山群である。梅里雪山の名にかくれて、その山名自体影が薄いのが、注目に値する山容である。まだ末登の筈、アプローチの便利さから言っても、すぐにでも手がけておかしくない。白芒雪山の峠に立つと両側はメコンの流域、梅里雪山は山稜に遮られて見えないが、北に続くサルウィン、メコンの間の山なみは四五〇〇—五〇〇〇m級のピークが果しなく連らなっている。が、際立った高峯はないようだ。峠からしばらく下ると梅里雪山山群がメコン河をはさんで視界いっぱいひろがる。想像していたよりもスケールは大きい。四川、雪南の雪山の中ではミニヤコンガに次ぐ規模である。翌日も好天を期待して

白芒雪山から徳欽

金沙江を渡って路は白芒雪山（ペイマン・シユエシヤン）山群の峠（四二三〇m）に向かつて支谷を登る。途中こじんまりしたラマ僧院を通り残雪の中を開けた台地状のコルにでると、正面に白芒雪山の全容が姿を現わす。立派な山群である。梅里雪山の名にかくれて、その山名自体影が薄いのが、注目に値する山容である。まだ末登の筈、アプローチの便利さから言っても、すぐにでも手がけておかしくない。白芒雪山の峠に立つと両側はメコンの流域、梅里雪山は山稜に遮られて見えないが、北に続くサルウィン、メコンの間の山なみは四五〇〇—五〇〇〇m級のピークが果しなく連らなっている。が、際立った高峯はないようだ。峠からしばらく下ると梅里雪山山群がメコン河をはさんで視界いっぱいひろがる。想像していたよりもスケールは大きい。四川、雪南の雪山の中ではミニヤコンガに次ぐ規模である。翌日も好天を期待して

A、梅里雪山及び白芒山山群概略図

- 1、地形、雪線は雲南省発行の40万分の1の地図に依る。
- 2、山名は徳欽で呼ばれているチベット名



徳欽（阿敦子）にて

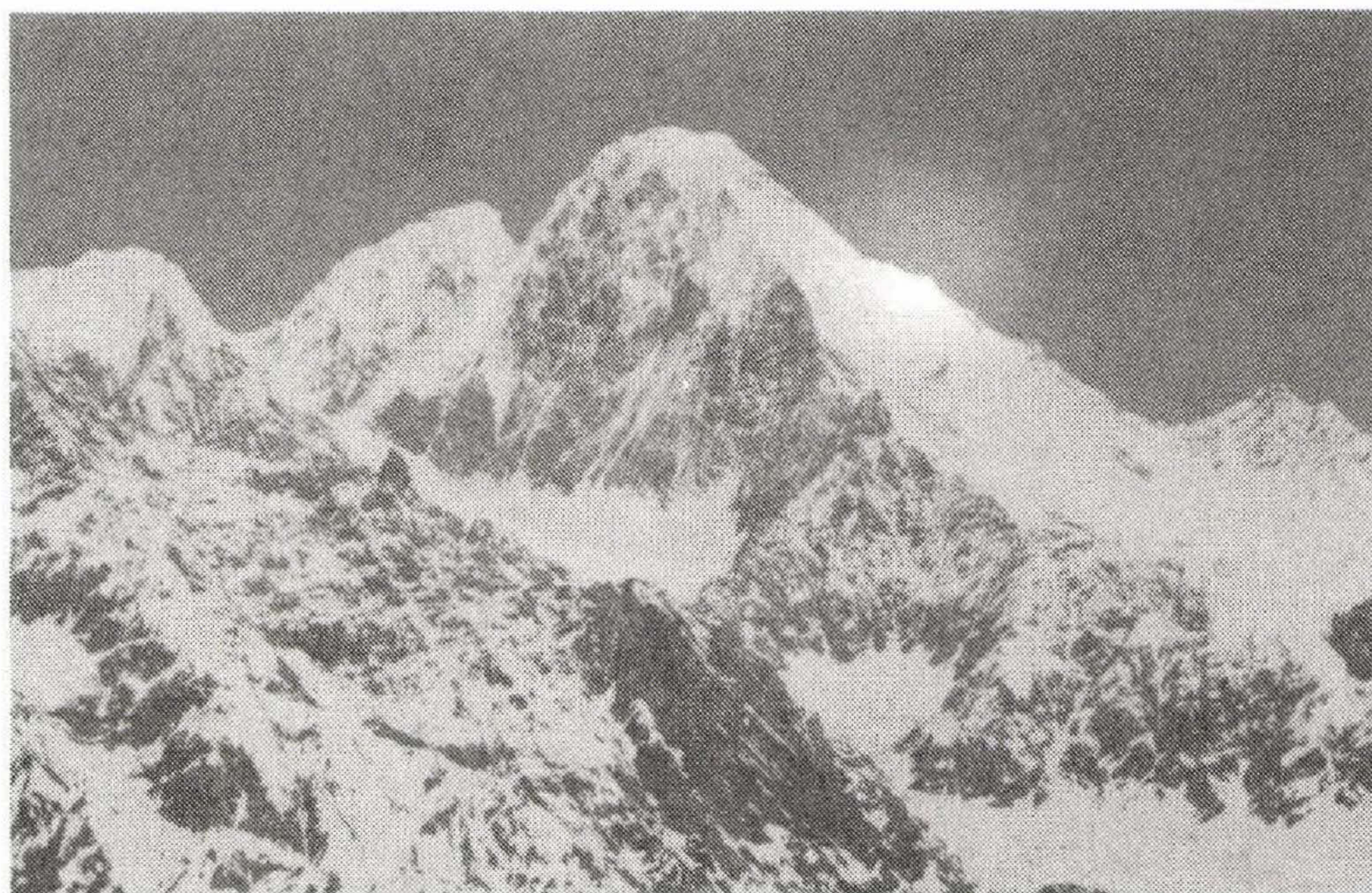
阿敦子 (A-tun-tsu) の名は雲南・東チベットに興味をいだき、キングドン・ウォード等の先人の足跡を少しでも知る人にとって、現在の康定（打箭炉）とともに憧憬の場所ではなからうか。この辺境の地で、往古より交易の要衝としてその役割を担ってきた。中甸よりも歴史があり、経済活動も盛んであると聞く。現在の徳欽県は人口五八〇〇〇人、チベット族が八二%を

徳欽に下る。

占める。街は谷沿いの斜面につくられ、昔のチベット風の家並は上部に残すのみで、中国のどこの街も同じだが、情緒ないコンクリートの箱が目立つ。ホテルも梅里酒店と言う四階建の立派なものが出てきている。カラオケバーあり、ビールルームありで、夜更まで賑わっている。ちなみに迪慶藏自治州の人工は三二〇〇〇〇人、うちチベット族は三四%、中甸県の人口は二二〇〇〇、チベット族は四〇%である。徳欽の街からは梅里雪山は山稜に影になって見えないが、すこし公路が山稜を廻りこんだところで、全貌を見渡せる展望台に出る。京大隊の遭難碑には一七名（うち六名は中国人）の故人の名が刻まれている。

梅里雪山に直面

四月二十九日、快晴。なんと幸運なことか。展望台で心ゆくまで山と向き合う。主峯の卡瓦格博（カワグボ）は写真で見慣れているが、ひと際大きい。北側の斯古都峯も重量感のある山、そしてとりわけ目をひくのは山群の南端に近いシャープなピラミッドが天をつく麗峯、面茨妯（メンジボ）である。何れも未登であり、主峯以外は試登すらされていない。登山許可が難しかったせいも、いずれにしても、徳欽県も今年



梅里雪山山群「斯古都峯」6,360m

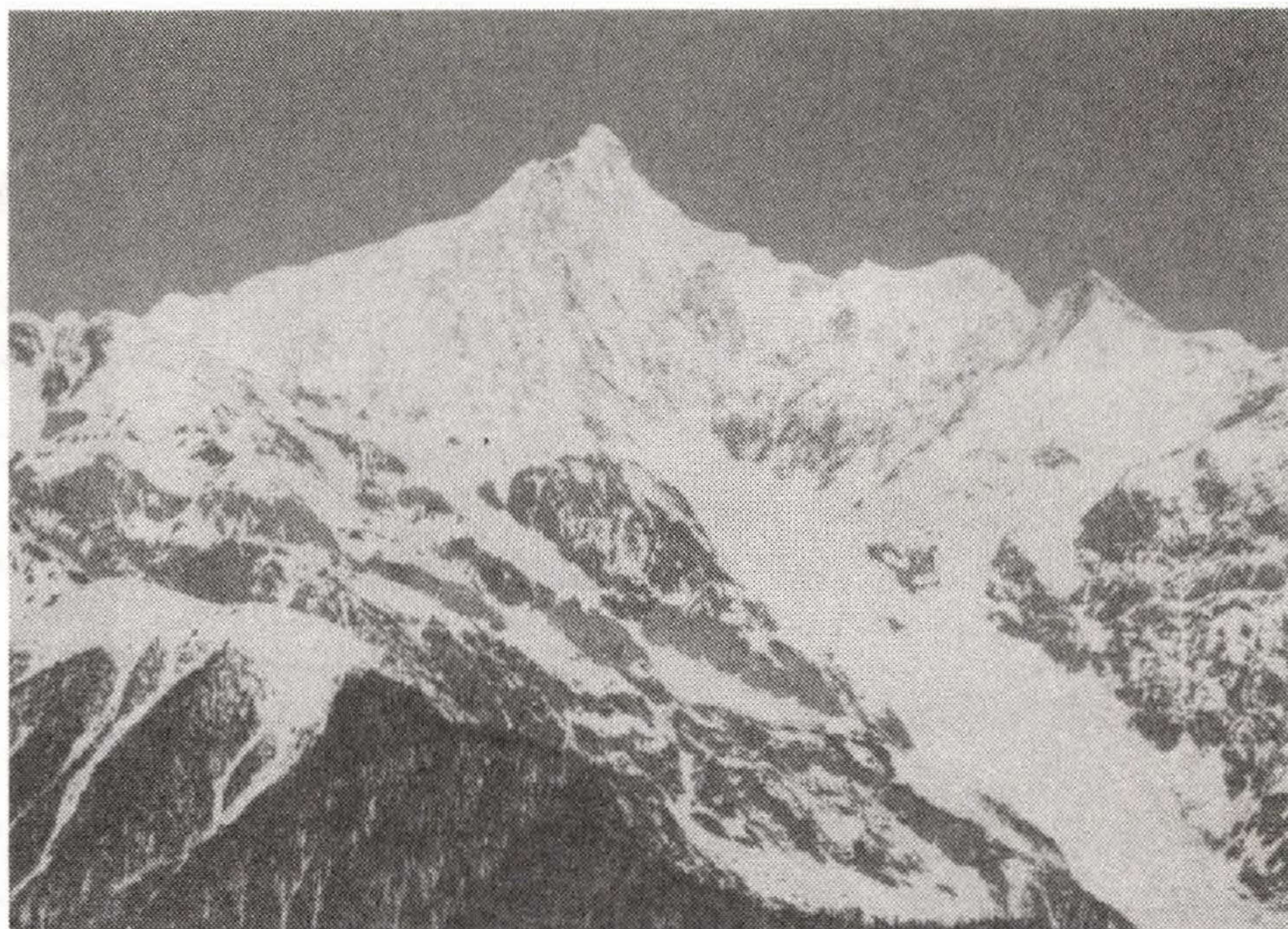
の一二月には、外国人に開放される（許可なしに自由に入れる）ので、早晚登山隊も手軽に来ることになる。キングドン・ウォードは前後二回入城して梅里雪山を踏査している。一度は大理、丽江経由、もう一度はビルマの北、イラワジ河上流からチベットに入り、サルウィン河を越えて阿敦子に至るコースを歩いた。後者の旅で彼は梅里雪山山群の東面を観察し、主峯の登路としては西面より東面に可能性ありと、著

書「ミステリー・リバー・イン・チベット」の中で記している。

ではサルウィン河側の西面はアクセスがより困難なのだろうか。更に上流の六〇〇〇m級の東チベットの雪山はどんな姿か、想いがつのる。しかし現状では梅里雪山のチベット側に入る許可は不可能なので、ラマ僧の巡礼に身をやつして入る以外に方法はないようだ。梅里雪山は西チベットのカイラスほど有名ではないが、ラマ教徒にとって聖山であり、信仰の対象になっている。毎年秋には巡礼が各地から徳欽に集まり、約三週間かけて一周する。その巡礼と行動を共にすればサルウィン側に入ることを当局はおおめにみてくれると、徳欽の前県長さんがアドバイスしてくれた。

梅里雪山の呼称

キングドン・ウォード等によりカカルポ（Ka-Kar-po）と呼ばれていたこの末踏の山群は、今では梅里雪山の名称が外国ではなじんでいるが、実は相当混乱している。地元で発行されているパンフレットや地図でも矛盾が見散され、統一されていない。したがって、この紀行の概略図や山容のスケッチでは徳欽のチベット人識者か



梅里雪山山郡主峯
「卡瓦格博峯」6,740m
(カワクボ)

ら聞いた名称を個々のピークに適用した。主峯の卡瓦格博はチベットの皇帝の意味。伝説によれば、その皇帝が納西族の女性を妃にむかえた。秀麗な面茨姍峯がそれである。二人の間に生まれた兄弟が太子峯と馬兵札五学（將軍の意）峯になったと言う。

しかし現在使われている通称は、山群、主峯の両方とも梅里雪山、或は太子雪山である。人によりまちまちな表現をしているのが実情であ

るが、梅里雪山の名称が普及しているので、山群全体を梅里雪山、主峯を卡瓦格博とするのが妥当であろう。なお標高については主峯以外は、地図や記録により異なるので、正確に測量されているかどうか不明である。

メコン河沿いに東チベットへ

徳欽の展望台からメコンに下り、公路を北上する。チベット自治区に入る許可はとれないが、チベット側で宿泊せず日帰りで行くなら問題なからうとのことなので、塩井の先へ入れるところまで行く。路はメコンの左岸沿いに進むが、一部チベット側に入り、省境を越え塩井に着く。



メコン河（塩井の手前）

金沙江やサルウィンと違い茶褐色の水が流れている。谷は乾燥して荒々しく、兩岸の山稜は陰しく高い。時折雪峯が支谷の奥に姿をあらわす。塩井は納西族の村、東チベットの塩の産地で、

この塩は良質で名高いとか。井戸から塩水を汲み上げ天日で乾かして塩をつくっている。塩井から公路は左岸の山腹を辿って芒康に出る峠に向かう。日帰りの制約があったので、やむなく途中から引き返すが、いつの日かラッサを目ざしたい。地図によるとメコンの右岸、即ちサルウィンとの間の背稜に、六〇〇〇m級の山があることになっているが、塩井の少し先からは大きな雪山は望見できなかった。仕事をやり残した気分で行路を戻る。再び展望台で逆光に映える梅里雪山に別れを告げる。次回は巡礼に加わり山群を一周し西面を探りたい。

天宝山から白水台

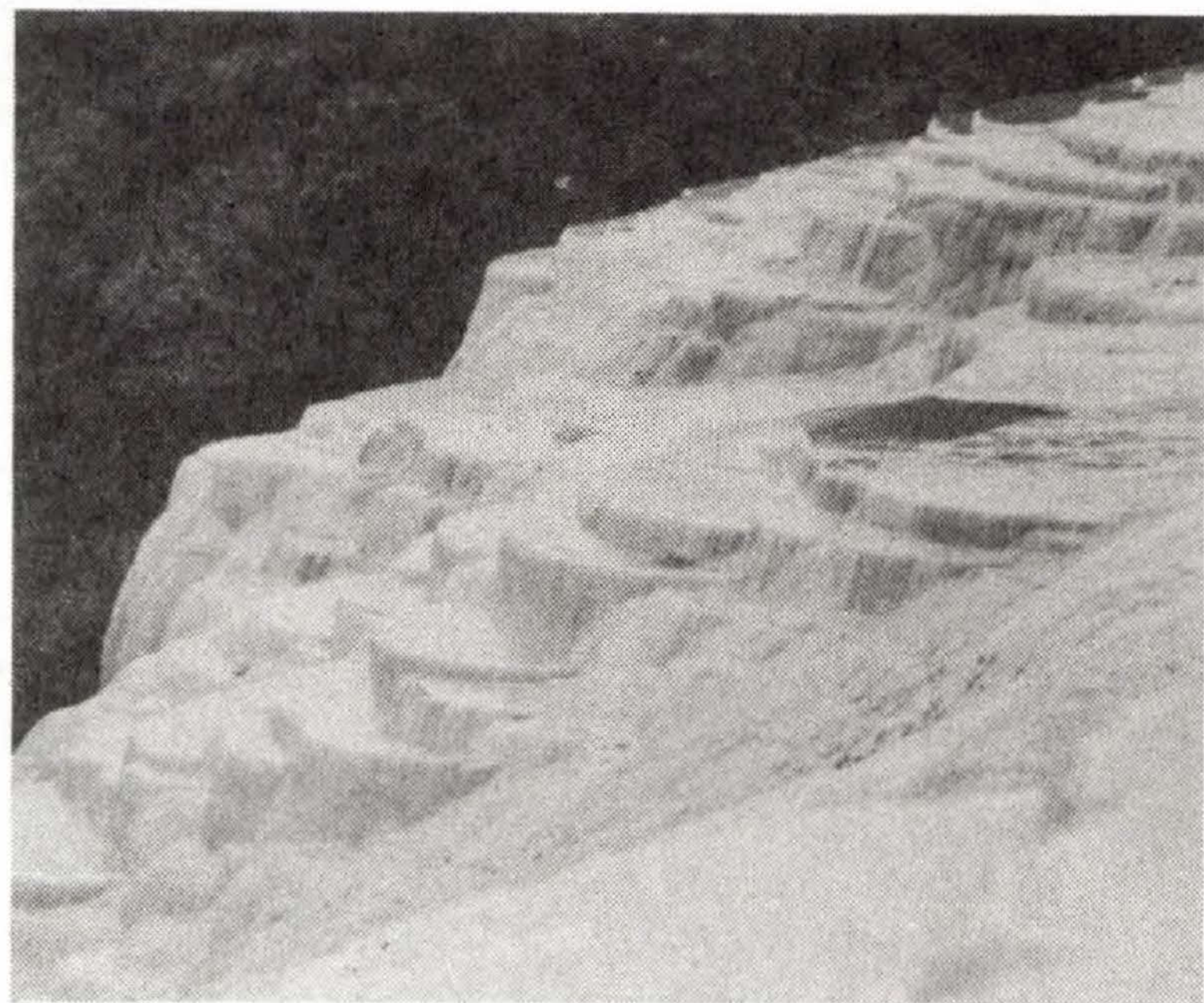
アメリカ人フリーターに教えられて、中旬から哈巴雪山西側の白水台に向う。公路の北側は四五〇〇m級の天宝山と無名の岩峯群が原生林に囲まれて聳えている。二つの山魂をぬって悪路は納西族の東巴文化発生の地、三項に通づる。途中の景観をほしのままに楽しむ。イ族の集落、石楠花の群落、そしてたおやかな哈巴雪山の西面を望みながら白水台に着く。白水台は地表にあらわれた鐘乳洞とでも言うおうか。天然の奇観である。観光に宣伝しているが、往復するのに中旬から一日要するので訪れる者は少ない。哈



天宝山 4,500m



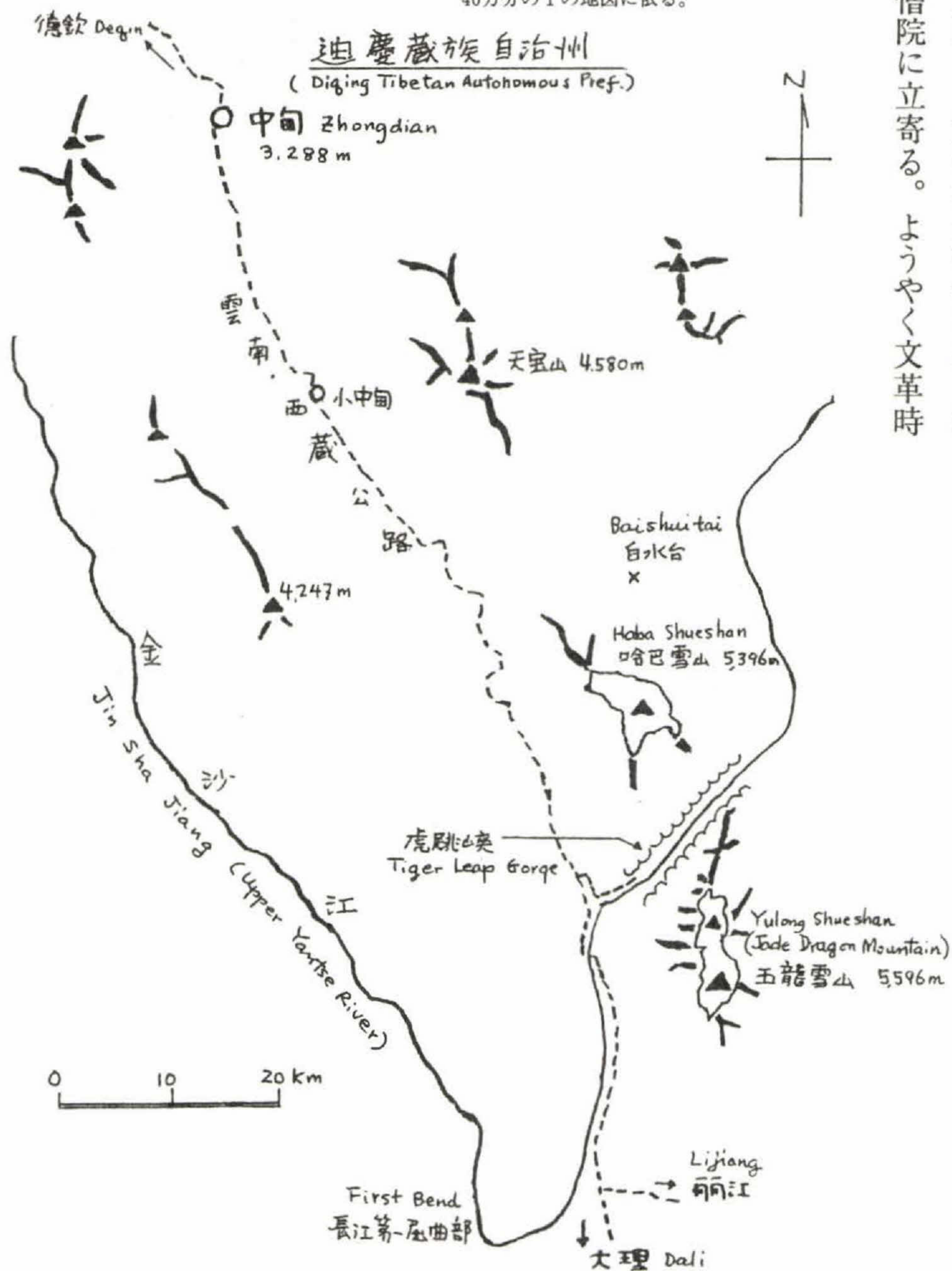
哈巴雪山 5,396m



白水台

B、哈巴雪山及び中甸周辺の概略

地形、雪線は雲南省発行の
40万分の1の地図に依る。



泸沽湖を訪れる

一週間続いた天気も、山の写真をすべて撮り終えた翌日から崩れる。雨のなか中甸をあとにする。中甸の大僧院に立寄る。ようやく文革時

巴雪山は玉龍雪山とは対象的に地味な山で、登頂を試みたと言う話を聞かないが、西側からは容易に登れそうである。雲南の氷河をもつ雪山の中では一番低い。早晚登られておかしくない。中甸高原をのんびりと四五〇〇mクラスの岩峯群をめぐるのも悪くない。

の破壊から立ち直って修復が進んでいるが、かつて五〇〇〇人いたラマ僧は一〇分の一に減っているとか。奥地における文革の傷跡は今も痛ましく残っている。途中、虎跳峡をのぞいて丽江に泊る。玉龍雪山は雲の中。丽江からは山に關係のない旅、雲南の山合いを上り下りを繰り返す。少数民族の自治県を二つ通過して泸沽湖に至る。モースー人については、いろいろ紹介されているので、ここでは省略するが、母系家



虎跳峡

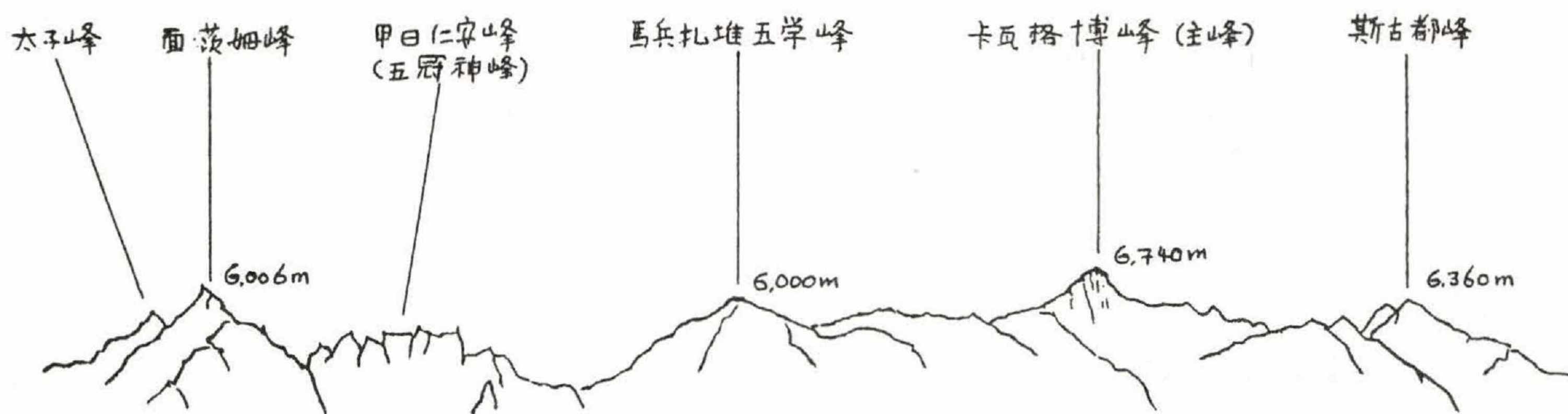
族、通い婚の風習は共産党により廃止が指導されてきたが、今でも残っていると云う。若い女性男性の気をひくための盆踊りのような行事は、じつに屈託がなく、陽気ではほえましい。モソー人の家に一晚お世話になる。家の中には以外に清潔で、心遣いも嬉しく、安心して休むことができた。泸沽湖は青い水たたえ、山つじと伝説の山に囲まれた美しい湖である。この自然と特異な少数民族の取り合わせは将来観光地として発展する素地が大きい。

次なる目標は

雲南、東チベット、ミャンマー（ビルマ）北部の三角地帯は、入域許可が極めて難しいこと、地形が険阻で道が未発達のため移動が著しく制約されることで、入域は容易ではないが、それだけに意欲がかきたてられる。孤立して生活する少数民族の中でもマイノリティーの人達、写真すら撮られていない未知の山群にはどんなピークがあるのだろうか。いつの日が一番乗りをしたい衝動を押え難い。幾つか探査のアイデアを挙げてみたい。

- 1、一巡礼に加わり梅里雪山山群の一周。
 - 2、一カカルポ・ラジへのチベット側からの接近。川蔵公路から察隅に至り、北側から近づく。
 - 3、一貢山からサルウィン河を遡りチベット側の山群を探る。
 - 4、一貢山からイラワジ河上流に出て独龍江の源流を歩く。
- いずれも実現の可能性は少いが、中国側のツテを頼りに方策を講じる価値はあろう。
- 最期に、今回の旅行で全行程中面倒をみてくれた中国康輝旅遊社の陸さん、運転手の李さんの協力に感謝しつつ筆を擱く。

梅里雪山・太子雪山(Ka-Kar-po)の山容



(徳欽の展望台、約3,500mよりメコン河対岸のパノラマ)

行程 (1993年4月25日～5月8日)

	ルート及び標高m	距離km	天 候	ハイライト
4月25日	香港－昆明 (空路)			
〃 26日	昆 明－大 理 1,894 1,950	398	晴	
〃 27日	大理－金沙江－中 甸 3,285	307	晴	玉龍雪山西面
〃 28日	中甸－白芒山口－徳 欽 4,230 3,480	184	晴・薄曇	白芒山・梅里雪山
〃 29日	徳欽－塩井 (チベット) －徳欽 2,630	246	快晴・晴	梅里雪山・メコン峡谷
〃 30日	徳欽－ラマ僧院－中甸	184	晴	ラマ僧院・山ツツジ
5月1日	中甸－白水台－中甸 2,620	204	晴	天宝山・白水台・石楠花
〃 2日	中甸－虎跳峡－麗 江 1,900 2,400	216	雨	虎跳峡
〃 3日	丽江－宁 蒗－落水 (泸沽湖) 2,260 2,680	308	雨・曇	雲南の山なみ・イ族
〃 4日	泸沽湖－宁蒗－永 勝 2,160	189	曇	泸沽湖・摩梭人
〃 5日	永勝－攀枝花－元 謀 1,000 1,150	341	曇	土林
〃 6日	元謀－昆明	214	曇	
〃 8日	昆明－香港 (空路)			
	合計	2,791		

註 記

1. 費用：US\$2,800.-

昆明到着後昆明出発までの15日間の全ての費用を含む。

2. 同行者：ガイド、運転手各1名

ホワイト・セールへの旅

引地 真

一、乗鞍

中村、土方、萬濃の三人がインド・ヒマラヤのホワイト・セール峰で消息を絶つてから丁度十年になる一九九一年九月、彼らと係わりの深かった針葉樹会員十一名と中村君のご両親、萬濃君のご父君が乗鞍の木立山荘に集まった。それぞれが彼らの思い出を語り、また近況について報告しあううちに、ぼくの同期の米田がインドのニュー・デリーに駐在していることが話題になった。せっかくなら彼がインドにいるうちに、もういちどホワイト・セールを眺めに出掛けるのもいいね、といった話になった。ぼくたちが酒を飲みながらワイワイ話すことは、その場での思いつきに終わることも多いが、その中には「それ本気になってやってみよう」ということもある。この時のインド行もそのひとつとなった。

事故当時、ぼくは彼らの登山隊の在京連絡先となっていたのだが、彼らが遭難するなんてほ

とんど想像していなかった。ぼくは、ぼく自身の山登りに夢中になっていて、彼らが下山予定を過ぎても戻ってこない、遭難の可能性があるという知らせを受けたのは、ぼくの初めての海外である韓国でのクライミングから帰ってきて間もない頃だった。訳のわからないままとりあえず第二陣捜索隊の一員としてニュー・デリーまで行って、現地からの連絡をただ待っていただけだった。その時、インドはぼくに無力感しか与えなかった。

その後、ぼくは海外勤務もあり、世界の色々な地域の山々を歩き回ったが、インドはぼくにとって、大きな重りのようになっていた。心にはいつも引つ掛かっているのだが、近付き難い存在だった。ぼくはあえてインドを避けてこの十年を過ごしていた。

乗鞍で皆と離れて、中村君のご両親と上高地を散策していると、そろそろこの重りをすっきりさせる時期なのかもしれない、と感じた。も

うそんなに深刻ぶって考える必要はないんじゃないの、と誰かが言っているような気がした。米田とはお互い勤務地が離れていたもので、もう長いあいだ会っていない。あいつのところ、ちよつと遊びに行くつもりでインドにでも行ってみるか。

二、ニュー・デリー

インドに行ってみたいな、と思っただけでも、東京でサラリーマン生活をしていると、日々の暮らしに追われてなかなかきつかけがつかめないものである。年が明けてしばらくした時、中村さんから連絡があり、「インドにもう一度行ってみたい」とのこと。これが怠惰なぼくを突き動かすきっかけとなった。早速、米田に連絡して現地の様子を聞いてみて、手配を依頼した。現地のことはすべて米田に任せることにした。ニュー・デリーとの連絡がFAXや電話で直接簡単に繋がることに世の中の進歩をあらためて感じてしまった。事故当時は、緊急連絡本部となった蒲田の加藤博行さんのアパートやデリーのアクバル・ホテルの部屋でいつ繋がるかと待ちわびながら電話に寄り添っていたことが思い出された。

一九九二年八月二十八日、萬濃君のご両親の

お見送りを受けてぼくたちは成田を飛び立った。メンバーは中村君のご両親、愚妻とぼくの四人。中村さんの奥さんは初めての海外になる。

二十九日未明、ニューデリー空港に到着した。空港で米田夫妻の出迎えを受け、ホリデイ・インに向かった。十一年前、捜索隊が投宿したアクバル・ホテルはもうなくなってしまっていた。

ニュー・デリーの喧騒は十一年前と変わってはいない。ジリジリ照りつける太陽も同じだ。

ただ、通りを走る車の種類が増え、牛の姿も心なしか少し減ったような気がした。以前は、アンバサダーとリクシャーばかりが通りを走り回り、そのかたわらで街中いたるところに牛がいたような印象があった。いずれにせよ、まさにインドの世界が相変わらずそこにあった。

三、マナリ

三十日、デリーから国内線に乗って、チャンディガール経由クルへ。当初、米田もいっしょにと思っていたのだが、生憎どうしても抜けられない仕事があり、ぼくたち四人だけとなった。少人数の駐在員の仕事は、自分の都合通りにはいかないことが多いのは、ぼくもよく分かっている。常に日本からの客に振り回されるものだ。とにかく今回は、彼と彼の奥さんの行き届いた

配慮ともてなしには心から感謝したい。

さて、クルの空港には、米田の手配により、マナリの旅行社から出迎えが来ており、ぼくたちは彼の車でマナリに向かった。クルからマナリまでは、車で約一時間の距離。美しい谷間を快適に飛ばして、ぼくたちの泊まるマナリ・リゾートというホテルに到着した。そこはマナリの中心街から南に約5km下がった場所であり、付近では最上級のホテルのようである。最近建てられた立派なホテルで、冬にはディオ・ティバ（六〇〇一m）山頂からのヘリ・スキーのツアーもアレンジしているそうである。

旅行社のシャルマ氏にぼくたちの旅行目的や経緯を話していると、彼はホワイト・セールの遭難事件を覚えていた。そして、その時、ヘリコプターから南東稜のキャンプIにはいり、雪崩に巻き込まれながら、決死の捜索活動をしてくれたマナリの登山学校（WHMI）の教官、マハビルは彼の親友だと分かった。ぼくたちはマハビルの消息を尋ねた。

「彼はいまでもWHMIにいるが、数年前スキー中に事故にあい、片足が不自由になってしまった。」

と顔を曇らせながら語った。ぼくたちはマハビルがマナリにいるとは思ってもいなかっただ

けに、シャルマ氏に、何とかマハビルに会わせてもらおうように頼んだ。

「たぶん大丈夫だろう。彼はヒマでぶらぶらしているはずだから。」

とシャルマ氏は答えた。ぼくは、マハビルは足が不自由になったために職を失ってしまったのではないかと想像し、暗い気持ちになった。

翌日はマナリで休息にあてることになったので、シャルマ氏はぼくたちをマハビルのところに案内してくれることになった。マナリの中心街からビアス川に掛かる橋を東岸に渡り、WHMIに向かった。あの時、捜索の指揮をとっていた当時のダイレクター、ハルナム・シン氏もすでに亡くなっていた。ひとつの目立つ建物が、彼にちなんで『ハルナム・シン・メモリアル・オーデトリウム』と名付けられていた。

中村さんは懐かしげに辺りを歩き回る。あの当時、中村さんも日本からの捜索隊の第一陣に参加して、ここに泊まって、三人の安否とマハビルを中心としたWHMIのレスキュー・チームの活動の行方を中心に砕いていた。中村さんは、あの時の緊迫した状況をひとつひとつ思い出してはぼくたちに説明してくれる。

そこにマハビルがスクーターに乗ってやってきた。スクーターから降り立った彼は、にこや

かに近付いて来た。足が不自由になったと聞いていたのだが、よく見なければ、かすかに足を引き摺っているのがわからない程度だ。彼は中村さんと当時のことをとてもよく覚えていた。ぼくたちはWHMIの中にある彼の住まいに案内された。部屋の中には、たくさんの山の写真が飾られ、彼の山への強い愛着が感じられた。ぼくたちは改めて当時の彼の献身的な捜索活動に礼を言った。そして、おそろおそろ彼の現状を尋ねてみた。

「数年前、スキートの教習中にクレバスに落ちて足を怪我してしまった。いくつかの病院で手当てを受けたが、思わしくなく、ボンベイの病院に一年近く入院して治療した。その結果、片方の足がほんの少し短くなってしまった。だから激しいクライミングはできなくなってしまった。」

ぼくたちの気持ちを察してか、彼は続けた。「今でもWHMIのインストラクターの仕事は続けている。実地でのクライミングの指導はできないので、講義を受け持っている。それにスキーならまだできるから心配してもらわなくてもいいんだ。」

ぼくたちは、まずは彼が元気に仕事を続けていることに安心した。さらに、彼は数年前に結婚していて、素敵な奥さんがぼくたちにお茶と

お菓子をもてなしてくれた。家族のことを話すマハピルの表情は実に幸福そうだった。

四、バタル

九月一日、ぼくたちは今回の目的地であるバタルに向かった。バタルは標高約四〇〇〇m、マナリからスピティ（近年外国人にも開放されたいらしい）に向かう道は、ここでインナー・ラインにかかる。一九八一年の一橋登山隊はここからBCに向けてのキャラバンを開始した。翌一九八二年には、金子、小林のOB二名と中村さんが訪れ、三人のための碑を建立した場所である。

中村さんは前回バタルで泊まった際、高山病に苦しんだため、今回は時間的には厳しいが、一日でマナリからバタルを往復することにした。

午前六時、ホテルを出発する。ヒツジの群が道をふさぐのをかきわけ、マナリの街を通り抜ける。道はロータン・パスへの長い上りとなる。ぼくたち一行四人とガイド、運転手の六人を乗せた『ジプシー』（日本のスズキがインドで合弁で生産しているジムニー型の車）は、少し苦

しそうなエンジン音を発しながらひたすら走り続けた。雲の切れ間からはハヌマン・ティバの姿が見えた。



十時十五分、三九七八mのロータン・パスに到着した。天気が良ければ、北側にはC B山群が見渡せるのだが、生憎その時は濃いガスに覆われ、何も見えない。風は冷たく、おもてに出たぼくたちは大急ぎでセーターを着込んだ。ロータン・パスの南のクルの谷は、緑が多い豊かな土地だが、北側は土と氷河の乾燥地帯となっている。ぼくたちはその乾燥地帯に向かって峠をくだり、チャンドラ川に沿ったガタガタ道をバトルを目指して進んだ。

荒涼たる景色と薄い空気、それに激しい車の揺れのせいで、ぼくたちは無口になっていった。乗っているぼくたちが疲れてくるのに合わせて、

車もバテてきた。何度か止まっては、運転手がボンネットを開け、水をかけて車の機嫌を直す。

午後三時、ぼくたちはバトルに到着した。今通って来た道の方角を振り返ると、ホワイト・セールの姿が見えた。バトルからのホワイト・セールは頂きを空に鋭く突き刺しているように見える。その山容は付近の他を圧倒している。ホワイト・セールの方向を向いていると、強い風が顔に吹き寄せてくる。ホワイト・セール氷河からバラ・シグリ氷河を渡り、チャンドラ川の川面を走り、ぼくに吹き寄せる風の中に、ぼくは彼らの声を捜した。

十年前に建てた碑は残っていた。しかし、そ

の表面に埋め込んだプレートはなくなっていた。

仏教の僧侶でもある中村さんは、ザックのなかから黒い僧衣を取り出し、それを羽織った。プレートがとられた跡だけを見せる碑の前に立ち、お経を捧げた。そのかたわらでは、中村さんの奥さんが同じ方向を向いてひざまずいていた。ホワイト・セールから吹いてくる強い風がお経をかき消して、空に運んでいく。

ぼくはひとりチャンドラ川の流れの傍に立って、三人のために山讃賦を歌った。ホワイト・セールからの風は、ぼくの声もかき消して運び去る。ぼくは胸のつかえが少しとれたような気がした。

「アフリカ行ーラクダ達との四日間ー」

斉藤 誠

九一年六月、三年三ヶ月勤務したJTBを退職し、妻と二人、アフリカへ向けて旅に出ました。七月二日、横浜発上海行鑑真号にて旅は始まりました。シベリア鉄道でクーデター二週間前のモスクワへ、その後も鉄道を乗りつぎながら、持参のテントでキャンプしつつ、九月十一日、アルヘシラスからタンジールへと船に乗り、

アフリカへの一步を踏み出しました。イスラム圏へ入ってからの、ねっとりとした舌で舐め回されるような濃厚な視線と、それまでの旅の疲れがたまった気がして、アルジェリアの首都アルジェからサハラ砂漠のどまん中、ブラックアフリカへ抜ける最後の補給基地タマンラセットまで、旅で初めて飛行機を使いました。ここか

らヒッチハイクでニジェールへとサハラを横断するつもりでしたが、その前に、ニジェールでは高くつくらしいラクダツアーをアレンジしました。値段と同行の士の折り合いがなかなか付かず、待つこと一週間、ようやく卒業旅行のイス青年二人と私達、計四人で、三泊四日三六〇〇ディナール、約三万六千円（一人当り九千円）食事自前、のツアーが成立しました。以下は十月一日から四日までのラクダツアーの物語りです。

ツアー出発の朝、キャンプの前には大小八頭のラクダが、ガイド役のジャッキー、アシスタント役のアハメドに引かれてやってきた。近くで見るラクダはさすがに大きい。

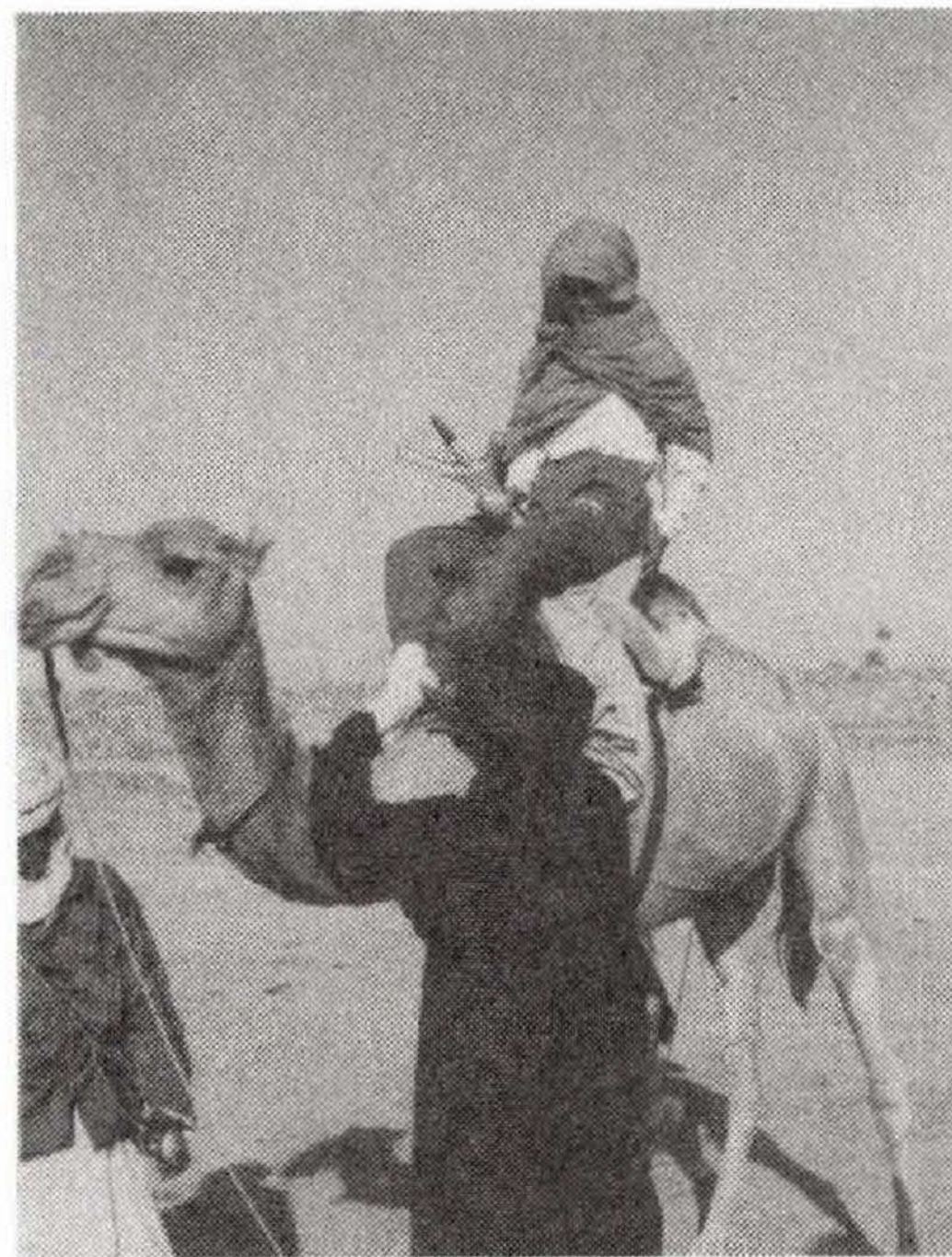
小さい方のラクダ三頭に荷物と水を載せる。

水はゲルバと言われるヤギの皮で作られた水筒に入っている。水筒といってもこれはまさにヤギそのものの形をしている。両足と頭を切り離し、中身をくり抜いたヤギの皮の袋だ。毛もそのままついている。皮膚の表面からにじみ出た水が気化熱となって働き、内側に貯められた水の温度を低く保つという。遊牧民の生活の知恵が生んだ便利なものだ。一頭分で約十五ℓの容量があり、私達のツアーには二袋携行された。

それでも六人四日間の砂漠の旅では十分な量とは言えない。どこか途中で水を補給するのだろう。私達の持ちこんだ荷物は、テント、寝袋、歯ブラシ、そして食糧とコッヘルとストーブ、二ℓのポリタンク一つ。ジャッキーとアハメドの荷は見たところ食糧のみだ。トアレグの旅の仕方が垣間見られるか楽しみだ。

町はずれまで歩いたところでラクダに乗ることになった。乗るほうの体型とラクダの性格を考慮して、各々に自分のラクダが割り当てられる。ラクダが足を折りたたみ、座った状態で鞍

に乗り、ジャッキーの相図で立ち上がる。立ち上がったラクダの背は想像以上に高く、私の視点は二メートル以上の高さになり、景色が違って見える。ラクダの背は広く、しかもデコボコなので馬に乗るように快適にはいかない。このラクダはひとこぶラクダだが、鞍はそのこぶ



の前に取り付けられる。つまり背中全体でいえばかなり前の方だ。その鞍にまたがるのだが、姿勢は決してまたがった状態ではない。両足を脇にたらすのではなく、ラクダの首の上にそろえておくのだ。ちょうど急な斜面に腰をおろしたような角度でしかも両足をそろえていなければならぬものだから、これが案外しんどい、さらに歩き出してびっくり。上下前後に激しく揺れるのだ。

タマンラセット周辺は、砂漠といってもホッ

ガーマウンテンと言われる山地で、SF映画に出てきそうな、山頂が平らで側面には垂直にきりたった崖を持つ奇怪な山々が散在する。高低差もあり、一般に想像されやすい。地平線まで砂しかない平らな大地の砂漠とはかなり違っている。谷の部分の地面は砂だが、傾斜地は岩あるいは石といったほうがぴったりだ。谷には乾燥に強そうなトゲだらけのアカシアの低木や草もはえている。

空は雲ひとつなく憎らしいくらい青い。一時間もいかないうち体中の水分が太陽に吸いとられてしまったように喉がかわく。タマンラセットの町でよく飲んでいた冷たいレモネードが幻覚のように何度も目にうかぶ。四日間、あるのはあの少しやぎ臭いゲルバの水だけか。早くも腰が痛い。ただひたすら、黙々とキャラバンは歩く。

十一時頃シエスタに入る。本当のキャラバンはこんなに休みはしないだろうが、なにしろこれは体験ツアーである。無理する必要はないというところか。草の豊富なところを選び、荷や鞍全てをラクダからはずし、前足にひもで足かせをして放す。ラクダは足かせがあるので、それほど遠くまでは行けないが、歩ける範囲で自由に動くことができる。人間はこの間昼食と昼

寝だ。ジャムをたっぷりつけたフランスパンとメロンを食べる。食べ終わったメロンの皮を放置しておいたら、出発の頃にはカラカラにひからびてしまっていた。恐ろしいほどの乾燥である。ジャッキーとアハメドは昼寝をしたあと起き出してたき火をおこす。食事を作るのはアハメドの係で、お茶をいれるのはジャッキーだ。お茶はいつも私達にもふるまわれた。

二時すぎ、ジャッキーがラクダを集め始める。彼は双眼鏡を持っている。それで見て、歩いて集めるのだが、ほんの五分程で八頭全部をひきつれて戻ってきた。再び鞍と荷をつけ出発だ。

一時間ほど歩いたところに深い井戸がある。再び荷をはずし、ラクダたちに水を飲ませる。ラクダたちがもういらないと飲むのを拒否するまで何杯でも飲ませる。ラクダはめいっぱい水を飲ませておくと、その後一ヶ月くらい水なしでも大丈夫なのだそうだ。まさに砂漠で生きるために生まれてきたような動物である。ラクダが満足すると、次は人間のために二つのゲルバを満タンにする。近くに張ってあったテントから、私達に気がついたおじさんがあいさつにやってきました。ジャッキーとは知り合いなのか和気あいあい、二人ともとても楽しそうだ。その間私は水の音を聞いて、こっちに駆けてくるよそ

のラクダを追い払えと言われ、必死でラクダに石を投げ続けた。

夕方は日が暮れないうちにビバーク体勢に入る。夜もまたラクダは足かせをして自由に動けるよう放しておく。私達はトマトソース+マカロニで夕食を作る。チリの入れすぎで辛くてまじい。スイス人二人は疲れたのか、それともあまりの辛さに怒ったのか早々に寝てしまった。

私達はジャッキーたちの起こしたたき火にあたり、お茶をごちそうになった。木が燃えるパチパチという音と、お湯のわくシュンシュンという音だけがここにある。サハラ式お茶の飲み方は、中国製緑茶を濃くいれさらにしばらく火にかけて煮つめ、それにたっぷりの砂糖を入れる。これをガラスの小さなコップに注ぎまたきゅうすに戻し、またコップに注ぎ……と六、七回繰り返す。砂糖の甘さとお茶の苦みが混じりあい温度も飲みごろに下がったところでできあがりだ。このお茶の習慣は砂漠に住む人々に深く浸透していて、中国茶は結構高いにもかかわらず、彼らにとってなくてはならないものとなっている。私たちはありがたく頂いた。空は満天の星。ジャッキーとアハメドはたき火のまわりに横になり、昼間は鞍にかけて座ぶとんとして使っている毛布を巻きつけ眠り始めた。私達も

寝よう。少し腰や肩が痛い。

朝、まぶしさで目を覚ますと七時すぎ。ジャッキーとアハメドは、すでにたき火をおこし朝食を作っている。食事は基本的に別々である。彼らはたき火で彼らの分だけを作り、私達はタマンラセットの町で、自分達で買い集めたものを、スイス人持参のストーブで調理し四人で食べる。私達の朝食はコーヒーとビスケット、パンといったところだ。砂漠の朝は寒い。不純物のない冷えた清らかな空気が肌に心地良い刺激を与える。熱いブラックコーヒーが特別うまい。食事のあと荷作りをし、それぞれ適当な岩かけを見つけて用を足す。強烈な乾燥が排泄物だろうと残飯だろうと、アツという間に干上がらせる。臭気や腐敗の猶予を与えない。だから砂漠は美しい。

ジャッキーはラクダを捜しに出かける。足かせをしているとはいえ、ラクダは時に一晩で十キロも歩くことがあるそうだ。ここは浅い谷になっっていてあまり視界がきかない。ジャッキーはラクダの足あとを頼りに捜しているらしい。ヒューッヒューッという口笛ともかけ声ともつかない音を発しながら、ジャッキーはどんどん歩く。四〇分近くたっただろうか。八頭全部を従えたジャッキーが戻ってきた。八時半、二日

目の旅の出発だ。

ラクダの旅はただただ黙々と歩く旅だ。ガイドといっても彼らは何かを説明してくれるわけではない。ただただ歩く。それは私達にとって残念なことでも不愉快なことでもない。見わたす限りの空間に人工的なものを一切排除し、あるのは荘厳な自然と私達だけ。太陽と大地と空と風と、この乾燥の中、尚みずみずしい生命力を感じさせる木や草があつてそこに私達だけがいて。こんな時、誰か他の人間のつけた山の名前を知ることがどれ程の意味を持つのか。私達もまたただ黙々とラクダに揺られ続ける。今日どこまで行くのか、何時に出発するのか、どの山が有名なのか、トアレグはどんなところに住んでいるのか、誰も聞く者はいない。ただ歩く。

シエスタに入ると、ジャッキーとアハメドはまず黒砂糖のあめのような甘いお菓子を、水と持参したヤギの乳（もしくはヨーグルト）で溶かして飲む。歩いている間彼らは一切水分をとらない。ラクダの上で何度も水筒をあけ、あつという間に二つの容器をカラにしてしまう私たちとは、まるで違う動物のようだ。その甘い飲物を飲むといきなりゴロンと横になり昼寝を始める。一時間半ほど寝るとアハメドが先に起き

出してたき火をおこし食事の準備にかかる。彼

らの食事は朝、昼、晩、四日間とも全く同じであつた。玉ねぎ、じゃがいも、ねぎ、チリ、瓜を炒め煮にしたスープを作り、炭状になつたたき火の上でしばらく煮こむ。一方、粉（これは麦やミレットなどの雑穀から作つたものかと思われる）を水で溶き、少し練つたところで、たき火の灰をサツとよけた熱い砂の上にそれを置き、軽いもえやすい枯れ草を、その上でボワツと燃やしこげ目をつけてから、砂と灰をかけしばらく蒸し焼きにする。六、七分でパンのでき上がりだ。このパンを小さく碎き、洗面器にならべ煮こんだスープをかけて食べる。私達も少しごちそうになつたが、なかなかイケる。トアレグの旅行中のおきまり料理だそうだ。食事のあとはジャッキーのいれたお茶でしめくくりだ。

ラクダを集めて再び出発となる。
昨日から少しグズつていたアハメドの乗るラクダが今日はさらに調子悪い。歩きながらもギューギューと変な鳴き声を出しつつ登り坂になるとイヤイヤをして立ちどまってしまふ。アハメドは叱つたりなだめたり、シエスタ中は水を飲ませたり、草を手ずから食べさせたりと忙しい。お茶の葉は体にいいからと、全部そのラクダに食べさせる。大変な気のつかいよ

うだ。

今日は昨日より少し早めに宿泊場所に落ちつく。宿泊場所の第一条件は何といっても、ラクダの食べる草が豊富にあることだ。人間の都合ではない。カレーライスを私達が作る。今日は好評。煮込むのは、私達も彼らのまねをして、炭火でやってみる。具合がいい。ジャッキーは私の運動靴がひどく気に入つたようで、しばらくながめたり、自分の足にあててみたりしてたと思つたら、おもむろに首にかけて貴重品袋から札束を出してきて買いたいと言ひ出した。ジャッキーは真剣だが、私もこれ一足しか靴を持っていないから売るわけにはいかない。必死でダメダメをする。ジャッキーは札束を増やすが、あくまでもダメという私の姿勢にそのうちあきらめた。

スイス人二人は化学専攻の大学生だそうで、就職前のいわゆる卒業旅行でやってきている。理系の人らしくフランス軍作成のホッガーマウンテンの地形図を持っていて、時々それを拡げて、今このあたりだと私達に説明してくれる。虫や植物をカメラで接写したりするのも好きなのうだ。その彼らがヒヤーツと奇声のような歓声のような大声をあげてさわいでいる。なんぞやと思ひ近寄ってみると、砂の上を真黒いザリ

ガニのような生物がモソモソと歩いている。サソリだ。体調六、七cmくらいの小型のものだが、刺されでもしたら恐ろしい。しかし彼らは純粹な好奇心でもって喜んでいるようだ。しばらく追いまわして遊んでいた。私達はテントを持っていくが、砂の上に直に寝ているジャッキーたちは平気なのだろうか。彼らは相変わらず平然としていた。

三日目。ずっと具合の悪そうだったアハメドの乗るラクダを、ついにこの地に残していくことになった。朝食を少し残し、お茶っ葉と混ぜ、アハメドは食べさせる。足かせをした状態のまま一頭だけおいていく。ここは草も豊富だし、ゆっくりして元気になるといいね。頭をなで別れを告げる。乗るラクダのなくなったアハメドは、あと二日間歩き放しだ。しかし特に苦痛そうでもない。ラクダの歩く速度は人間のそれとほとんど変わらないし、本物の行商キャラバンでは人間はめつたにラクダに乗ったりしないと聞く。彼は裸足でテクテクと小さい荷物用のラクダ二頭を引いて歩き続けた。

一時間程歩いたところで山の中腹にトアレグ族のテントを見つける。黒いやぎが二〇頭近くいる中、子供達が走り回っている。私達を見つけて、テントからお母さんと大きな息子が出て

きた。私達全員にあいさつし握手する。キリツとしたしかし優しそうな女性だ。ジャッキーは何やら水場を聞いているらしい。彼女は、手で方角を指し示しながら説明している。もともと知り合いなのかどうかは知るよしもないが、先日会ったおじいさんといい、この女性といい、トアレグ同士の会話は、まるで久しぶりに会った家族と話しているかのように親密でうれしそうだ。私達は礼を言い彼女が指し示した方角にさらに歩みを進める。狭い谷をかなりさかのぼったところで、ジャッキーがラクダを降りるよう命令。水はいつさい見当たらないが、いかにもかつて川が流れていたような地形、ワジだ。川の上流によく見られるような大きな石がゴロゴロし、川の流れにあたる部分の地面の砂はやわらかい。ジャッキーが洗面器でそのやわらかい枯れた川床を掘ってみる。何も出てこない。彼はさらに奥に歩いてゆく。私達とアハメドは水が減ってペタンコになったゲルバをかかえて後につづく。巨大な岩のかけになった部分の砂をジャッキーが掘り始めると、どこからでできたのか何十何百という蜂が近寄ってきた。水だ。砂を掘れば掘るほど、水がわき出してくる。少し濁った水ではあるが、ジャッキーはゴクゴクとそれを飲む。そして、その水を洗面器ですく

いあげてはゲルバに注ぐ。水が少なくなるとまた砂をかく。するとまたサーツと水がわいてく



るようにたまる。私達は夢中で水を貯えた。

一日歩くと体がボキボキと音をたてるほど疲れるのがわかる。ラクダを降り、しばしもうろうとして私達に

「ファティギユ？」(疲れた?)

とジャッキーが笑いかける。彼もフランス語がペラペラというわけではないが、片言の問いかけはみなフランス語だ。私達はフランス語がわからないので、タマシエク語(トアレグの言葉)で言われたって同じなのだが、彼はなぜかフランス語を使う。

「ウイ ファティギユ ファキイギユ」

「岩手山」歩き

河野 正

いささか、偶発的な動機なのだが、飲料自動販売機（小岩井牛乳だったと思うが）に使われていた写真にひどく触発されて、東北の独立峰——岩手山——に登りたいと思っていた。標高こそ二千メートルを僅かに越えるばかりの山ではあるが、「南部片富士」と称される通り裾野の広い山であり、好んで登っていた東北の他の山々とは一味違った趣きを持っている。

この山に向かったのは5年前の夏休みであった。夏休みとは言っても九月も終わりで山の麓には秋の気配が色濃く滲んでいた。

行くと決めたものの、まず考えなくてはならなかったのはアプローチの問題であった。新幹線を使えば、上野—盛岡間を3時間余りで行けるとはいうものの、9月ともなれば、その先のバスの本数も限られ、時間的制約も多く受けることになる。したがって少々の無理は承知のことと、車を使って山麓まで入り込むことにした。

土曜日の昼前に、大方の荷物を車のトランクに放り込んで一路軽快に東北道突き進む筈であったが、アプローチの環状七号線が渋滞で車が遅々として進まない。「日本の交通事情をここ

まで駄目にした元凶は誰だ」等と心の中で叫びながら、アクセルとブレーキを忙しく踏み替えていた。何とか、東北自動車道に入り込み目的地への第一歩となったが、時刻は既に午後二時を回っており、いつ到着するものかと先が思いやられたが、片側三本線の道路になってからは心地よく思いの外距離を稼ぐのに捗った。途中、日本の高速道の中でも屈指の眺めと言われている安達太良サーピスエリアで軽食を取るなどしながら、一路北へ向かって行った。仙台を過ぎる頃にはすっかり回りは暗闇に包まれたが、午後八時過ぎには滝沢インターチェンジを下りることができた。ここから、登山口である柳沢道は距離にして約6km弱で、左右に開拓農場の暗闇を置いて何なく到着することはできた。しかしながら、車道はまだ先に続いており、「確か馬返し迄伸びていると何かに書いていたな。」と思い出したことと、「一時間も車道を歩くのはいかなわぬ」という怠け心が顔をのぞかし、キャンプ場をパスして更に車を進めた。だが、一本道だと思つてついた所が、全く明かりのない道に、左右から農道が複雑に入り組んできてお

り、気付くと自衛隊の演習場の迷い込みそうになっていた。（実際、夜間の自衛隊演習場は余り気持ちのいいものではないと思った。）道を引き返して、馬返し迄たどり着いた。星が眩い夜といった風情ではなかったが、天気予報も含め明日の好天の期待はできそうであり、車の脇に天幕を張ってシュラフに潜り込んだ。

翌朝も、雲一つない青空という訳にはいかなかったものの、天気が直ぐに崩れるという様子もなく、軽く朝食を摂り、（相い変わらずのインスタントラーマンであるが）午前七時頃に登り始めた。この山も、東北地方の他の山と同じ様に、登山道の入口に「熊に注意」の警告表示板がある。以前、飯豊山を川入から登った時にも同様の警告板があったのを見肝を冷やしたことを思い出した。勿論、その時にも熊には会わなかったし、それは以前にも以後にも熊を見かけたことはないが、昔の人達は色々な意味での慎重さを持って山に登っていたことだと感じた。登り口から暫くは、緩やかな樹林帯の中であり、眺望も楽しむことはできない。やや樹林が切れかかり、灌木帯に変わる三合目付近でようやく見眺らしを得るようになった。振り返ると、これがこの付近の特徴なのであろう、田畑ではなく農場が広がり、日本離れした牧歌的な風景が

楽しめる。灌木帯の九十九折りの急坂をマイペースで登って行ったが、幸い荷物も軽いせいもあって九時過ぎに岩手山山小屋に着くことができた。快調なペースと言えは言えなくもないが、これが幕営道具一式を背負った山登りであったらこうもいかないであろうと思ってみた。小屋の付近には宿泊者の姿は見られず閑散としたたずまいで、僅かに小屋番の人がいるだけであった。話によると、前日も夫婦連れの宿泊者が一組だけで、朝方に頂上に向かったとのことだ。「そちらの足なら頂上で追いつくかもしれないよ。」と言われたが、追いつく理由も意味もないことから、「いえそんなに急いでもおりませんから」と返事をして頂上に向かうことにした。この小屋から見た頂上は独特の趣きがあり、椀を伏せたような形は妙な重量感を覚えたものだった。ここから、間近に見える不動平迄は頂上のお鉢の裾野を巻くような緩い登りであり、不動平で他の登山口の登山道で合流し、一気に頂上迄の急坂を登ることになる。振り返ると間近に小岩井農場を見下すことができ、また、秀峰の一つとも言える秋田駒ヶ岳（この山にも後日行ったのだが、山頂迄は自動車道の終点の八合目から一時程で行ける。）が至近に感じられる。程なく急登を終えると眼下にお鉢が広がって

た。このお鉢は想像以上に大きく、はるか昔の大爆裂を偲ぶことができる。お鉢を左回りに十分程行くと二〇四五mの最高点に到着した。

東北地方の最高峰と言えは、御承知の通り秋田と山形の県境に位置し、頂上は紛れもなく山形県内に在る鳥海山の新山であるが、ここ岩手山は「東北第二の高峰」と謳われる時があるらしい。しかし、「飯豊連峰（最高地点の大日岳は新潟県内だが、飯豊山主峰は新潟を山形の県境にあつた筈）の方が高さは高いんじゃないか。」等と雄大な景色には似合わない瑣末な事を考えた。

ここから見えるのは八幡平の鬱蒼とした森と散りばめられた湖沼が手を伸ばせば届くように感じられ、また、これも独立峰として気品を感じられる早池峰山を望むことができた。しかし、対照的に点在するスキー場の色を失った斜面と動きをみせないリフトを見ると「レジャー開発」という言葉の意味をしばし考えてしまった。

お鉢を回っている途中、風向きのせいもあるが時々硫黄の匂いがしていた。お鉢の所々で煙りが上がっており、下りて地面に手を当ててみると確かに熱く、火山活動が綿々とはあるが確実に断ぎれなく続いていることが判る。お鉢巡りも終え、岩手山山小屋に下りると、小屋番の人が、「もうシーズンも終わりで、来週位に

は小屋を閉める。」と話していた。小屋番の人の勧めで小屋裏から引いている湧水にポリタンクの水を汲み換え、山小屋を後にした。

登りと同じ道を下るのは余り好きではないが、車を置いている手前文句を言うこともできず、農場に飛び込むような形で急坂を下りて行った。途中、別の登山者とすれ違うこともなく、また、注意の出ていた「熊」にも遭遇することもなく、無事に駐車場に到着した。（時刻は丁度十二時頃であった。）ここでも他のハイカーも見かけることがなく、実に静かな所だと感じた。

丁度昼食時であり、空腹感もそこそこあったが、「せっかくだから、小岩井農場のジンギスカン料理を。」と思い、農場迄行くこととした。向かう途中からやや雲行きが怪しくなり夕刻には強く冷たい雨が降り出した。

翌日、ラジオからは岩手山に初雪があつたことを伝えていた。山の天気は変わりやすく自然は怖いと思った。同じラジオで、鈴木大地が金メダルを獲得したことを報じていた。一九八八年の秋だった。

会務報告

平成五年度総会は七月十二日(金)夕刻より如水会館にて開催されました。

当総会にて審議・承認された事項は次のとおりです。

平成五年度針葉樹総会

1 平成四年度 活動報告

(1) 懇親山行

四年十月二四、二五日(二泊二日)で日

光太郎山 出席者 七名

(2) 会合

(a) 評議会 四年六月二四日

(b) 総会 四年七月一日

(c) 忘年会 四年一二月一二日

(吉沢・近藤両先輩の卒寿のお祝いを兼ねる)

(3) 出版物

(a) 会報 第七八号

(b) 如水会報 投稿(特になし)

2 新旧役員対照

(1) 会長、副会長(平成五、六年度)

会長 石原 脩 (留任)

副会長 高崎 治郎 (留任)
(会長代行)

(2) 評議員 (平成五、六年度)

卒業年度

松下 順吉 十九 留任

小林茂雄(議長) 十九 "

樋口 洪 二二 "

田中 一雄 二三 "

笠原 広信 二四 " ↑岩崎利一

石原 脩 三〇 "

高崎 治郎 三一 "

山本健一郎 三二 "

上原 利夫 三三 "

倉知 敬 三八 "

佐藤 久尚 四一 新任↑笠原広信

加藤 正巳 四三 留任

松尾 信孝 四八 "

加藤 博行 五一 "

兵藤 元史 五二 新任↑浅田 充

松田 重明 五三 留任

引地 真 五五 "

(3) 幹事

代表幹事 西牟田伸一(留任)

総務 石丸 義男(留任)

会計 河野 正(留任)

会報 引地 真(留任)
稲毛 尚之(留任)

山行 加藤 博行(新任)↑浅田 充

兵藤 元史(〃)

学生担当 西牟田伸一(留任)

天羽 康之(新任)↑山内 太

保 険 河野 正(留任)

(4) 監事

山本健一郎(留任)

佐藤 久尚(留任)

(5) 新人紹介

天羽 康之(平成五年卒)

3 平成五年度 活動予定

(1) 懇親山行

(a) 秋の山行(五年一〇月頃)

(b) 春の山行(六年三月頃)

(2) 会合

(a) 評議会

(b) 総会

(c) 忘年会(又は新年会)

(d) 幹事会(二回)

(3) 会報 第七九号平成五年八月発行予定

第八〇号平成六年三月発行予定

平成四年度 遭難対策基金収支計算書

単位：円

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料 当年度基金有高	40,000 4,757,930	前年度金有高 学生保険料 (一般会計より) 利息	4,625,606 40,000 132,324
合 計	4,797,930	合 計	4,797,930

平成五年度 遭難対策基金予算案

単位：円

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料 当年度基金有高	40,000 4,897,930	前年度基金有高 利息 学生保険料	4,757,930 140,000 40,000
合 計	4,937,930	合 計	4,937,930

平成四年度 決算報告

単位：円

支 出	金 額	収 入	金 額
会報発行費	228,506	納入会費	845,000
	(400,000)		(1,000,000)
総務／雑費※	128,416	雑収入	36,576
	(60,000)		
通信連絡費	128,597	前年度繰越	42,661
	(120,000)		(42,661)
学生保険費	40,000		
	(40,000)		
三岳部補助	200,000		
	(200,000)		
名簿発行費	177,263		
	(180,000)		
次年度繰越	21,455		
	(42,661)		
合 計	924,237 (1,042,661)	合 計	924,237 (1,042,661)

平成五年度 予算案

単位：円

支 出	金 額	収 入	金 額
会報発行費	500,000	納入会費	850,000
総務／雑費	60,000	前年度繰越	21,455
通信連絡費	100,000		
学生保険費	40,000		
山岳部補助	150,000		
次年度繰越	21,455		
合 計	871,455	合 計	871,455

会計幹事からのお願い

既に納入頂きました方もいらっしやることとは思いますが、針葉樹会々費の納入のことを紙面を借りてお願い申し上げます。針葉樹会々費の発行を含め会の運営は全て会費にて賄われております。公私の時間を割いて会に尽力していただきます各幹事の活動を支える上でも、会費の速やかな納入をお願いいたします。

銀行振込口座はさくら銀行堀留支店 普通
5127042 針葉樹会郵便振替口座は東京
2116687 針葉樹会 ですので、何卒宜しくお願いいたします。

月見の宴のご案内

本年の月見の宴は、例年同様一橋祭当日の一〇月三〇日(土)に国立部室にて開かせて頂きます。会員各位のお越しをお待ちしております。

会員計報

近藤恒雄さん(昭四)

6月13日午前0時13分急性呼吸不全のため、享年90才11ヵ月

6月16日信濃町千日谷会堂において告別式が催され、針葉樹会員は学生を含め38名が参列した。

尚、次回会報(来年3月頃の予定)を、近藤先輩の追悼特集号と致したく、故人を偲ぶ文章を広く募集致します。



編集後記

今年の夏は十数年ぶりの冷夏と天候の不順で、夏山本来の楽しみが多少なりとも減じた気がしておりますが、会員各位の皆様は如何だったことでしょうか。

本号は、非常に興味ある海外紀行文を中心にお届けさせていただきます。

今後とも国内外を問わず広い分野においての文章をお待ちしておりますので宜しくお願いいたします。

次号の予定は別項の通りの故近藤先輩の追悼文及び今年の夏を中心に会員諸氏が行った山行を中心に明年三月の発行を目指しております。

針葉樹會報

第七十九号

編集人 下 167

東京都杉並区南荻窪三―二九―二三

稲毛 尚之

発行日 一九九三年八月三十一日

発行所 針葉樹會

印刷所 篠田印刷

